

「自然」が育った葛西臨海公園に 巨大施設はふさわしくない

葛西臨海公園探鳥会担当 飯田陳也

都立葛西臨海公園の近況について、東京オリンピック招致関連で、6月号に「2020年に葛西臨海公園にカヌー競技場建設計画再浮上！」というお知らせをしました。また、同号のnew鳥人暖話に、探鳥会リーダーの鈴木弘行さんが「今、葛西が面白い！」と書きました。今回は少し視点を変えて、私が所属している地元の団体「葛西東渚・鳥類園友の会」（会長下野 稔氏）の環境にかかわる活動を紹介して、葛西における大問題への取り組みをお伝えしたいと思います。



この会の始まりは、葛西臨海公園で定例探鳥会を開始した1995年頃にさかのぼります。当初、探鳥会担当者を中心に「江戸川自然観察クラブ」として観察会などを続けていましたが、2000年に内湾漁協と清掃イベントで東なぎさに立ち入るため、行政向けに現在の名前にしました。現在会員は約80名で、年に10数回のイベントなどを実施しております。

鳥類園周辺的环境保全の取り組みは、野鳥ウォッチング、昆虫・鳴く虫観察会、植物観察会、竹林整備、ヨシ刈り、田圃のビオトープ管理 水質調査・水中の生き物観察などで、世話人がそれぞれの得意分野を担当します。都の公園協会と江戸川区にボランティア登録し、また、地元の「えどがわエコセンター」といっしょに、フィステバルや交流会などを通して区民にその活動をアピールしています。多様な活動は周辺の子供たちにも浸透しつつあり、若い参加者が目立ちます。

近年注目された取り組みとしては、以前繁殖していたセイタカシギが営巣できるように環境整備をして繁殖を成功させ、「干潟の貴婦人復活」に貢献しました。また、江戸川区では繁殖記録のなかったカワセミについて、自然教育園の矢野亮先生の助言を得て東京都に提案し、営巣用の築山を造成し、2007年に3羽が巣立ちました。当地ではそれ以来、カメラマンだけでなく、散歩に双眼鏡を下げてくるという「野鳥ファン」が増えています。

葛西臨海公園は開園から23年を経過し、土壌も植生も豊かになり、海・河口・池・湿地・草原・林などの変化ある環境に生まれ、多様な生態系が形成されています。現在問題となっている、カヌー競技場建設予定地（公園西側）だけに限っても、これまでの観察によると鳥類（山野の鳥）76種、昆虫140種、クモ80種、樹木91種、野草132種を記録し、東京23区では絶滅危惧種に指定されている生物を26種も確認しています。建設予定地一帯は、区民が身近で自然に親しめる貴重な場となっています。

葛西東渚・鳥類園友の会では、この地を潰して、オリンピックのための巨大な施設をつくることに反対を表明し、6月18日に、江戸川区議会議長あてに『当建設計画の内容・問題点を知らされていない多くの区民の意見を聞き、葛西臨海公園が自然の回復・保全を目指して整備された経緯を踏まえて、東京都へ「カヌー（スラローム）競技場は別の適した場所に建設すべき」との意見書を提出して頂きたい。』という陳情書を出しました。

今後、日本野鳥の会東京、〔公財〕日本野鳥の会と連携を取りながら、関係方面への働きかけを進め、当会の重要な探鳥地である葛西臨海公園の自然環境破壊を食い止めたいと思っています。